



伝日田市ダンワラ古墳出土金銀錯嵌珠竜文鏡
径 21.1cm、厚さ 2.5mm



伝日田市刃連町出土金錯鉄帶鉤

金銀錯嵌珠竜文鉄鏡

—伝日田市ダンワラ古墳出土—

賀川 光夫

はじめに

昭和三七年（一九六二）故梅原末治は天理博物館で白木原好美が研ぎ出しをしている鉄鏡に驚異的金銀錯による文様が検出されていることを述べ、入手先の日田市で、出土地の確認を要請された。その後梅原自身が現地へ赴き、発見者渡辺音吉の案内で出土地を訪れ、周辺の状況から日田市日高町字東寺、俗にいうダンワラから出土したと判断された。ダンワラ古墳は昭和八年（一九三三）、九大本線造成にさいして破壊されたが、渡辺の記憶から八メートルをへだてて二つの細長い形跡があつて鏡はその西側に遺存しており、さらに鉄刀、彎等が出土したとしている。また並列の東側のあい似た所から、碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス製小玉などが出土してそれらは今に渡辺が保存している。梅原は古式古墳、堅穴式石室と思しき所から鏡は出土したと合点し、雑誌『国華』（梅原末治「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」『国華』八五三号一九六三年四月）にその詳細を述べている。

さて梅原が述べているように、鉄鏡の鏡背を嵌玉の金銀錯龍紋で飾った工芸資料は中国でも類例少なきものであるだけに、鉄鏡自体の問題と共に出土地の確認、出土状況についての吟味が必要である。

一 日田市ダンワラ古墳出土金銀錯嵌珠龍文鉄鏡

伝ダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡は、径二一・一センチ、厚さ二・五ミリ、反りのない偏平の鏡で、背文に金銀錯による龍文を基調に各所に玉を嵌入したものである。鏡の文様は鉄錯のために腐蝕して全体の三分の一を殊すに過ぎないがそれでも十分にもの状態を窺い知ることのできるものである。

背面の中央に径三センチを越える大形の紐があり、周辺の四葉座の葉間には「長宜子孫」(「子」字欠落)の吉祥句を金の篆体で表わす。四葉座は蝙蝠状に広がり外縁を金、内縁を銀の二条の線で構成し、中に金銀の細線で渦雲文を入れ、中心に杏仁形のガラス玉を嵌入している。ガラスの色調は風化して明らかでない。内区の模様は大小の蛟龍の文様を絡ませて金象嵌で表わし、眼や体の節に緑色の珠玉を嵌入して文様効果を上げている。主文様は欠落部分が多く、全容を明らかにすることは出来ないが、四葉座間の文字、「長」字の下方に右半分を失っているが双角の龍が大きく口を開いた状態を表わし、眼には珠玉が嵌入している。また「宜」字の下方には左側面を向いた龍を相対させ、その眼には緑色珠玉の破片が付着している。

小龍は「長」字下、双角蛟龍下方にあり、双角を振り立てて、眼には緑色の珠玉を入れている。体には魚鱗の文様を入れ、体の節には嵌玉がみられ、鱗には金・銀を使用して色彩を効果的に表わす高度な技法を用いている。鏡縁は金象嵌で絡み合う龍を変形させた渦雲文で表わしている。

さて以上の金銀錯嵌珠龍鏡を出土したダンワラ古墳に就いての詳しいことは一切不明であるが、この鉄鏡のほか貝製雲珠、鉄製目装辻金具がある。またこの鏡と別に日田市刃連町出土といわれる金錯鉄帯鉤があるがこれも鉄の酸化腐蝕の状態や、金錯の技法からみて金銀錯嵌珠龍文鏡と関連があるものとみられる。

二 日田市刃連町出土金錯鉄帶鉤

伝日田市刃連町出土といわれる帶鉤は大小二個である。大形のものは細長い舌状をなし、表面を蒲鉾状に整えたもので、全体に金象嵌が施されている。文様は縁沿いに細い界線を設け、内側は菱形に割り付けられた区画内に三組を一単位として連勾雲文を並列して裝飾文とし、地を渦文等でうめる。これらの文様は帶鉤の中心軸線を中心としてほぼ左右対称に配されている。

小形の帶鉤は軸部と飾り部からなり、飾り部は丸みのある三角形をなし、全体に金象嵌が施されている。文様は鉄錆と腐蝕、風化によって明らかでないが、不規則な直線、曲線によって構成されたものとみえる。

金象嵌帶鉤は戦国時代から漢代にかけて流行したとされるが、それらは金銀象嵌や鍍金裝飾による華やかなものが主流をしめる。戦国時代後半の時期にあつては、裝飾に力点がおかれ非実用的で豪華なものが多いとされ、漢代になると型式化がすすみ、次第に規格化して実用的になるといわれている。日田市出土の大小二個の帶鉤もその実用的な典型といわれてきた。この帶鉤はダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍鏡と関係が有るか無いか、きわめて問題を含んでいるが、文様・彫刻技法・鉄地などの細部検討し、加えて鉄地、金材質の科学分析によって関係を確かめなければならぬ。

三 洛陽焼溝漢墓出土の鉄鏡

日田市ダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍鏡について梅原末治は中国本土でも希な遺品としてるように貴重な鏡である。鉄鏡に金銀錯嵌、玉嵌入の技法はまさに希な類例として、これに関連するものを上げれば、一九五二―五三年にかけて、発掘が行われた洛陽市西北方焼溝地区の漢墓の調査によって出土した八面の鉄鏡を検討することが必要で

ある。

焼溝漢墓は、磚室墓、土壙墓等からなり、遺物の点検から、それらを六期に（1期・前一一八—六五年……VI期・一四七—一九〇年）分類している。そのVI期に相当する時代の副葬遺物として八面の鉄鏡が出土している。鉄鏡の大きさは、最大二一センチ最小一一センチで、すべてが扁円鈕をなしている。鏡は著しく腐蝕がすすみ、文様のはっきりとしたものはみられず、一〇三七墓二八号の鉄鏡に変形四葉文らしいものがみられる。それについて潮見浩は焼溝漢墓一四七墓出土の「長宜子孫」連弧文鏡（青銅鏡）を例としてダンワラ古墳の鉄鏡の四葉文と比較し、焼溝漢墓での分類では十型に分類され、年代はV式、後漢晩期に編年されている。また一〇三五墓出土の三面の鉄鏡は長宜子孫連弧文鏡、変形四葉文鏡、三獸鏡などの青銅鏡と共に出土しているところから、後漢時代V期に位置するとして焼溝漢墓出土の八面の鉄鏡はすべて後漢時代後半にあると考えられている。

さて梅原末治はダンワラ古墳出土鉄鏡の鏡背の文様の特徴が河南省金村出土の金銀錯珠龍文鏡を参考にその手法からみて前漢時代の作品と考えている。これに対して潮見浩は焼溝漢墓の四葉座の変遷から見て蝙蝠座にちかい形式となり、この形式は、後漢時代の長宜子孫内行花文鏡の特徴とする。また葉間に配置されている長宜子孫の文字は縦長に延びていて、後漢時代の特徴をしめすものと考えている。このように潮見はダンワラ古墳の金銀錯嵌珠龍鏡の年代を洛陽焼溝漢墓出土の鉄鏡から割り出し、後漢時代の製作鏡としている。

四 象嵌鏡と鉄鏡

梅原末治は中国の象嵌鏡について、洛陽金村古墓群出土の狩獵文鏡と夔鳳文鏡の青銅鏡に注目して象嵌の技術について、次のように述べている。戦国時代後半の、象嵌鏡は作りが二重体で、映像（表面）は白銅であるのに、象嵌の

部分は青銅の上に施されている。しかるに漢代鏡を特徴づける、銅（七〇パーセント）、錫（二〇パーセント）の合金、白銅鏡は硬質であるが粘性を欠いて脆く、象嵌を施すのには難があった。白銅鏡に対して鉄鏡は鍛造されたものにあつては象嵌を前提として、彫文が可能である、と述べている。

中国における鉄鏡は後漢代の斐鳳鏡が目立って多く、特に白木原和美の研ぎだしによって鮮明に画像が複製された故守屋孝藏所有の斐鳳鏡は鍛造鉄とみえ、平滑な鏡背に浅い彫文を刻み金錯を施した過程がよく分かるものだとされている。斐鳳鏡については鉄鏡に文様を彫像した例が多く、梅原はアメリカのミネアポリス美術館所蔵のものに注目している。これにたいし潮見は甘肅省武威雷台漢墓出土の金銀錯鉄鏡に注目している。

雷台漢墓は墓道・羨道・前室・中室・後室からなる多室構造の磚室墓である。数多くの出土品のなかで銀印・青銅馬が注目され、その銅馬の銘文「守左騎千人張掖長」から張將軍夫妻合葬墓である事がわかった。鉄鏡は後室から発見され、これについて潮見は次のように述べている。

鏡は直径二一センチ、鉄錯におおわれ、両面に織物の後が残っているが、鈕は半球状を呈し、エックス線の透視によつて金銀錯の文様が判明している。鈕の周辺に四葉の文様があり、葉間に長宜子孫の文字がある。内区の文様は斐鳳文で、四対の二羽の鳥文が現されている。外区は一六の連弧文であり、中に蔓状の渦文をもつてうめられている。この金銀錯嵌斐鳳鏡は銅馬の銘文によつて後漢靈帝と献帝の間一八六―二一九に当てられることがわかる貴重な資料である。

斐鳳鏡については白木原和美の『台湾故宮博物館藏金錯斐鳳文鉄鏡の周辺』という論文が注目される。白木原は天理大学に在籍の間、しばしば梅原末治の委嘱により、工芸資料のうち鉄象嵌の酸化腐蝕の困難なものについての補修・修理・復元の作業を実施し、難解な問題に挑戦して不明の資料を見事に旧態の文様に再生させた。その技術の高度な

点においてまさに第一人者である。奈良県東大寺山古墳出土、漢の中平年間の造作をしめす金象嵌の銘文、刀銘については、錆び落しと共に銘文解讀の素養がないかぎり、かなり恐ろしい仕事であるが、白木原の高度な知識はそれを克服し、さらに国産の刀と中国産の刀との分別に手掛りを得たといわれる程の実績をあげられた。

さて台湾故宮博物館蔵の夔鳳鏡はもと京都の故守屋孝藏所蔵品で出土地不明であるが、梅原末治によって故宮博物館に納められたものである。白木原はこの鉄鏡（直径二二センチ・縁高さ〇・二センチ）の錆び落し、修復に携わり、復元図を書かれていた。鏡は半球形の鈕、四葉文の鈕座があり、葉間に長方形にのびる文字「長・孫」の文字が辛うじて残されている。内区の四部分にはそれぞれ一對の鳳鳥があり、頭に冠毛・尖嘴・大きな目がある。鏡縁は一六の連弧文があり、弧文の中は変形の渦文でうめられている。この類型の獸首鏡は朝鮮半島、楽浪郡平壤付近出土の延熹七年（一六四）銘鏡、アメリカ・ワシントンのフリヤ美術館蔵、熹平三年（一七四）銘鏡、ベトナムのオケオ遺跡出土の夔鳳鏡等の銅鏡等と作風の一致した同一類型のものであることが明らかにされている。こうしたことから夔鳳鏡は後漢時代に製作され、各地に波及したものと見ることが出来る。その中に金銀象嵌の鉄鏡がかなり含まれていることが明らかになってきた。

五 鉄鏡についての記録

中国鏡の中で鉄鏡は銅鏡に比べると著しく少ない。鉄鏡に就いての故事・古典を調べてみても余り多くない。そのうち金・銀錯鉄鏡についての記録は少なく、魏の『曹操集譯注』や『鄴中記』に見られる程度である。

『曹操集譯注』（安徽毫県「曹操集」譯注小組）の「上雑物疏」に

御物有尺二寸金錯鉄鏡一枚、皇后雑物用純銀錯七寸鉄鏡四枚、皇太子雑純銀錯七寸鉄鏡四枚、貴人至公主九寸鉄鏡

四十枚。

『鄴中記』（欽定四庫全書・史部）に

石虎三臺及宮内中鏡有徑二三尺者純金蟠龍雕飾

とあり、原点を引いて『北堂書抄』以下をあげると次のようなものがある。

『北堂書抄』卷一百三十六（隨・虞世南）・鄴中記云石虎宮中鏡有徑三三尺者下有純金蟠龍雕飾。

魏武上雜物疏云御物有尺二寸金錯鏡一枚皇太子雜用物純銀錯七寸鉄鏡四枚貴人至公主九寸鉄鏡四十枚

明鏡四規・抱朴子云見上、純銀七寸・魏武雜誌物疏見上、金蟠龍・鄴中記見上、銀龍頭・東宮舊事見上、金錯鉄鏡・

魏上雜物疏云有尺二金錯鉄鏡一枚補、純金雕飾・鄴中記見上

『初學記』卷三十五（唐・徐堅他『奉勅撰』）：金錯 銀華・魏武帝上雜器物疏三十種有金錯鉄鏡一枚九寸銀華小

鏡見敘事九寸、三尺劉振別傳曰以九寸明鏡面視之曰識己形當令不忘如此其神不疾患不入鄴中記曰石季龍三臺及内宮中

鏡有徑二三尺者有尺五寸者

『太平御覽』部七一一（宋・李昉他『奉勅撰』）：魏武帝上雜物疏曰御物有尺二寸金錯鏡一枚皇太子雜純銀錯七寸

鉄鏡四枚貴人至公主九寸鉄鏡四十枚鄴中記曰石虎三人臺及内宮内鏡有徑三三尺者純金蟠龍雕飾

『全上古三代秦漢六朝文』（清・嚴可均校輯）全三國文卷一・魏武帝：上雜物疏御物有尺二寸金錯鉄鏡一枚皇后

雜物用純銀錯七寸鉄鏡四枚貴人至公主九寸鉄鏡四十枚・書抄一百三十六、初學記二十五、御覽七百一十七

以上の記録によると魏武帝（曹操）、後趙国石虎等の上雜物に鉄鏡があることがわかる。特に魏武帝に関する記録

は重要で、皇帝の御物として尺二寸（後漢尺は二・五・三四、魏尺で二・八・九三センチとなり、以下魏尺二四・一二セ

ンチを使用する）の大形の金錯鉄鏡があり、皇太子は銀錯鉄鏡七寸（一・五・九センチ）、貴人、公主は径九寸（二・一・

七センチ)の鉄鏡とあるから、これによって後漢時代から、魏代にあっては皇帝以下、上層階級の間にも金錯鉄鏡、銀錯鉄鏡、無文の鉄鏡が用いられたことを知ることができる。また『鄴中記』によると後趙国の宮中の鉄鏡は(二三尺とあるのは二・三尺の過ちであろうか。それでも五三センチの大鏡となる)蟠龍の金錯が施してあったことがわかる。ここにみえる鉄鏡は青銅鏡に比較していずれも大形であることがわかる。金銀錯には青銅鏡に施すより硬質な鉄鏡が適しており、高価な金銀の彫錯には鉄の素材が用いられたものと見られる。金銀錯嵌によって製作された鉄鏡は周代以来の爵位を玉器で現すことと同じように皇帝以下主要な階級に限って用いられたものと推理することができる。

さて鉄鏡に金銀を錯入する技術は本来西方のスキタイ系遊牧種族の武器や馬具などの動物衣裳を基本とするものと考えられるので、後趙国(鄴中記)石虎三臺、宮中の蟠龍金錯鉄鏡に興味がそがれる。後趙国は匈奴系の羯族の出身である石勒が三三〇年に国を立てた。このことによってスキタイ人に似た生活様式の遊牧諸民族スキト・シベリヤ系の金錯嵌工芸技術と見ることは出来ないものであろうか。

六 金銀錯珠龍文鏡の研ぎ出しと出土地

ダンワラ古墳出土の金銀錯珠龍文鏡は天理大学で白木原和美が梅原末治の依頼を受けて鉄鏡の錆び落とし、金銀象嵌の研ぎ出し、復元作業を行ったことについては既に述べたが、一九九一年五月に詳しく当時の事情を聞くことができた。それによると錆び落としの後、金銀錯は、ひと続きの線(金銀糸)として残っているのではなく、ごく短かく細い金片として数ミリ程度、しかも疎らに存在していた。それは金魚がつつき残した素麺屑のようであって、この微細な象嵌の検出は研ぎ出しによる方法以外には検出、復元は出来ない。このような苦労のすえにほぼ三分の一程度の復元が完了したのであるが、もとより完璧ではないと言う。したがってまだまだ研ぎ出しの部分は残されていたので

あるが、梅原は待ちきれず、提出を急がされた。梅原は錯嵌の技術をみて感動の余り何十センチも飛び上がって喜んだと言うからこの鉄鏡がいかに貴重なものであるかがわかる。

つぎにこの鉄鏡の出所であるが、梅原は探索を私に命じたのであるが、もとより難解なことであった。後日梅原自身は西下し、渡辺音吉にその出所を尋ねたことについては冒頭で述べた通りであり、ダンワラ古墳の出所となつてゐる。ところがこの鏡は梅原自身『国華』八五三号で述べているように奈良市玉林善太郎経営の店より請い受けたと書いているように、北九州で入手（梅原の書簡には日田市出土とあった）したことが書かれている。このように鉄鏡の出所は明確でないとするほうがよいと考えていた。

金銀錯嵌珠籠鏡は馬具と共に出土しており、巻貝を嵌め込んだ雲珠が含まれていた。若しも鉄鏡と馬具等が同時副葬とすれば、これらの遺物を出した古墳は、日田地方にあつては五世紀以降の年代としなければなるまい。

さて私の記憶によれば、日田市周辺の遺物の一部がもとの三芳小学校に保管されていた。たまたま一九五〇年前後大きな筧に弥生式土器片や土師器・須恵器等に混ざつて腐蝕の著しい鉄塊、馬具等が保存してあるのを見せてもらった。その中に巻貝を詰めた雲珠があり、錆びの著しい偏平で大きめの鉄塊をはじめ錆びて正体の分からない大小の鉄塊が認められた。これらは一括して雑然とした状態であつたが、すべて九大線開設工事の土取りにより、各所から見つけ出したものと説明されたことを記憶している。この時の記憶が間違ひなければ、梅原が奈良で入手した鉄鏡と雲珠を含む馬具類は筧の中の一括遺物の中にあつたものかも知れぬ。このことは、雲珠を手がかりとして偏平な鉄塊を推理してのことである。過去の記憶と推理が確かであるとすれば、梅原に鉄鏡の出所をダンワラ古墳と答えた渡辺の記憶にも耳を貸さなければならぬ。三芳小学校とダンワラ古墳跡は最寄りの位置である。そこで日田市出土に間違ひないが、確実にダンワラ古墳と断定することだけは控えておきたい。

七 金銀錯珠龍鏡の出土の年代

金銀象嵌の鏡は既に述べたように洛陽金村出土の青銅鏡に施された戦国時代の夔鳳文が最も古く、漢代には後漢の夔鳳鏡（鉄鏡）に象嵌を施したものである。また宋代の『博古図録』には唐代のものが多数収録されている。これらの金銀錯嵌の技法は時代によって特徴があるが、銅鏡に比して全体として出土数が少なく問題も多い。

ダンワラ古墳の鉄鏡について梅原末治は鈕座の四葉文の特徴と、これまでの夔鳳鏡と鉄鏡についての文様の特徴を検討したうえで前漢時代の製作としている。それは内区縁端部の文様を夔鳳に近い動物と見立てて、先の洛陽金村出土の夔鳳文鏡と対比させながら絡み合った龍の構図から推理したものと見られる。

梅原の前漢製作説に対して潮見浩はダンワラ古墳の金銀錯嵌珠龍文様鉄鏡鈕座が後漢の四葉文の特徴をあらわし、かつ長宜子孫の文字も後漢の連弧文鏡と関係するとし、洛陽燒溝漢墓の調査例をひいて連弧文長宜子孫鏡が流行した後漢時代後半の製作とみている。しかし内区の主文の龍は複雑に絡み合っており、青銅鏡にも例がなく、年代の特徴を明瞭に出来ないとして疑問を投げ、梅原のあげる金銀夔鳳文鉄鏡（ニューヨーク。戴氏蔵）を考慮に入れている。

つぎに一九九〇年九月九日、日田市で行われたシンポジウム『東アジアと古代九州』に参加された江上波夫はダンワラ古墳の鉄鏡の金銀錯、嵌玉の細工は巧妙な技術で、これまでに例を見ない貴重な出土品であり、細工の特徴からみてスキタイ系の美術を考えてみる必要があると述べた。更に金錯の帯鉤にもふれて、帯鉤は北方騎馬民族が使用する厚い外套の帯留めだと推理して鉄鏡や帯鉤の鍛造技術、金錯の技法等から、北方遊牧民によるスキタイ系の作品ではないかと指摘した。時代については五胡十六国時代、四世紀をあてるのが妥当で、文様、文字等からみて、中国漢・三国の作品とは思えないとしている。

一九九二年五月、私は、東京国立博物館でダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍鏡と刃連町出土の帯鉤を比較して充分

観察することができた。その結果として次の点で共通するものがあつた。

(一) 両者は鍛造によって製作され、酸化腐蝕が同じように層状をなし、表面から剥離腐蝕をはじめていること。その剥離腐蝕の状態が同じ環境のもとで、同時期に進行していると認められた。

(二) 金錯の方法は彫金の技法で、表現上、若干の違いがあるものの、金錯の方法が共通しており、基本的技術は同じであると観察される。

(三) 金錯に銀錯、嵌珠の併用は鉄鏡のみに用いられているが、帯鉤とは文様のモチーフの相違によるものと考えられるので全く別技法とは思えない。

以上の諸点を考えてみると、これらは、岡崎敬のユーラシア草原初期遊牧騎馬文化に見られるスキタイ系文化の影響と関連し、それらによるところが大きいと見なければならぬ。例えばダンワラ古墳にみる絡み合った龍の文様は、スキタイ的動物意匠で、鍔金、彫金、打ち出しの技法などと関連して検討すべきである。

おわりに

日田市日高町ダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡と刃連町出土の金錯嵌帯鉤は共に鍛造・錯嵌の技術によって製作された。その酸化・腐蝕・風化の状況は極めて類似点が多い。両者は出土の状況が必ずしも明かではないが、口碑による出土地は鉄鏡が日高町、帯鉤が刃連町で同所のように近い。しかもいずれも国鉄九大線開発のさいに発見されたものといわれており、両者は同所出土の可能性がある。

さて鉄鏡、帯鉤ともに極めて稀にみる金銀錯、嵌玉の技術をもって、特有な文様を施したものであるだけに、製作年代に就いては多くの意見がある。しかもそれぞれの博識ある意見はどれも根拠を上げてのことであり興味を尽きな

い。その中で江上波夫のスキタイ系動物文様の展開に就いての考えは注目したい。中原・漢中において発した銅鏡の文様は錯嵌技法に適せず、僅かに出土している鉄鏡からみて、中国に発した技法でないことは明かである。そのことを『北堂書抄』以下の記録、「魏武上雜物疏」に言う皇帝御物金錯鏡、皇太子銀錯鏡、貴人・公主鉄鏡など階級によって區別しているところから輸入された鏡であることも推理できる。スキタイの彫金技術のうちサフノフカ古墳（一九〇一発掘）、出土の前四世紀の額飾りに儀礼の場面が現され女神の手に鏡がにぎられている。鏡は既にかなり普及していたとみなくてはなるまい。また前一世紀には黒海北岸一帯に彫金象嵌の技術が盛んに行われているので鉄鏡に象嵌が行われたことを示唆している。

日田市ダンワラ古墳の金銀錯嵌珠竜文鉄鏡の如く特異な鉄鏡は未だ類例がなく、いかなる理由によって何時伝来したかも明かでない。ただまさに稀有な宝器として導入されたものであって、それを三国時代（後漢末）魏武帝（曹操）が金錯鏡を所有していたとする記録に徴すれば交流の夢が膨らみそうになる。

巻頭の金銀錯嵌珠竜文鉄鏡、金銀錯帯鉤は大分放送の提供による。また『曹操集譯注』『鄴中記』については、友永植の協力によって使用した。ここに感謝をあらわしたい。

主な参考文献

洛陽区考古発掘隊 『洛陽燒溝漢墓』 中国田野報告集 考古学専刊 一九五九年

梅原末治 「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠竜文鉄鏡」 『国華』 八五三号 一九五三年

賀川光夫 『大分県の考古学』 吉川弘文館 一九七二年

岡崎 敬 『東西交渉の考古学』 平凡社 一九七三年

岡崎 敬 『図説・中国の歴史』 三 講談社 一九七七年

三輪嘉六 「考古学の世界」 『大分の古代美術』 一九八三年

潮見 浩 「漢代鉄鏡覚書」 『古文化論叢』 児島隆人先生喜寿記念論集 一九九一年

白木原和美 「台湾故宫博物館藏金錯夔鳳文鉄鏡の周辺」 『熊本大学文学部論叢』 一九九〇年

『太平御覧』 服用部 一九

『曹操集譯注』 安徽亳県「曹操集」譯注小組

『欽定四庫全書』 史部 鄴中記（晋・陸歳撰）